

## 追悼 都留重人先生

日本を代表し、世界的にも著名な経済学者である都留重人先生がお亡くなりになった。たまたま教授会の際に、朝日新聞記者からの「伝言メモ」で知った。都留先生は戦争前に渡米され、ハーバード大学で過ごされた。20世紀を代表する経済学者シュンペーターの下で、ガルブレイスなどの経済学者と交流したという。戦後まもなく経済安定本部で第1回の経済白書を執筆され、一橋大学学長などを務められ、経済学の理論と現実の政策展開に大きな影響をあたえた。

伊東光晴先生は2月9日の毎日新聞で「現実と理論の間を埋めて」と題して追悼文を書いている。それによると「自ら最後の本と言われたものを8月から用意し、11月から本格的な執筆に入り、12月10日最終稿を完成させた。」その直後に倒れられたが、初稿の校正を終えてから入院されたという。最後の最後まで、学者としての生涯を貫徹された。まもなく岩波書店から刊行される、先生最後の本は『市場には心がない 成長なくて改革をこそ』である。このタイトルにも引かれて、かなり前に注文しておいた。「改革なくして成長なし」として、強引に「改革」をおし進める小泉構造改革に対する鋭い現代日本分析を早く読みたいものだ。

都留先生からは多くの著書を通じて経済の理論と政策を学んだ。最初に読んだのが、信州大学時代に先生が編集された『現代資本主義の再検討』であった。確か外書購読の時間にも、『資本主義は変わったか』という英語版を訳した記憶がある。当時はあまり理解できなかったが、この本のタイトルには引かれるものがあった。

都留先生については、宮本憲一先生から学ぶことが多かった。『環境と自治』にも書かれているように、宮本先生は水田洋・島恭彦・都留重人という3人の「大変すぐれた」先生に出会って、社会資本論などを構築された。とくに都留先生と宮本先生をつなぐのは、学際的な公害や環境経済学の分野であろう。都留先生は1964年に宮本先生らと四日市の公害を調査された。この成果のちに訴訟につながった。4大公害裁判の一つである四日市公害裁判は提訴から40年、判決から35年が経つ。

ゼミ生であった中村達也中央大学教授の追悼文によると、都留先生は「戦前、日本の大陸侵略に抗議する学生運動によって八高を除名処分」となり、「心に期するものを抱いてアメリカに渡った」(中日新聞2月10日夕刊)という。旧制八高といえば、現在のわが山の畑キャンパスである。八高時代の都留先生のことを知りたくなった。

(2006年2月13日 記)